

## 図書 紹介

### 寄生虫病の話－身近な虫たちの脅威－

著者:小島 荘明 (東京大学名誉教授)

発行: (株)中央公論出版社 / 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7 / TEL 03-3563-3668 /

新書判 / 242 頁 / 価格 780 円 (税別) / 2010 年 10 月 25 日

第二次世界大戦直後の日本は回虫や鉤虫(こうちゅう)の寄生率が国民の90%を超えていた。その後、駆除が積極的に行われ、一時はこれらの寄生虫がほとんど見られなくなった。その当時は寄生虫というと主に回虫や鉤虫の仲間であったため、日本には寄生虫はいなくなった、と言われるようになった。しかし最近では回虫や鉤虫などがほとんど見られなくなった代わりに獣肉、鳥肉、魚肉、その他は虫類、両生類などの生食嗜好により、寄生虫に感染するケースが増加し、特にゲテモノ嗜好がグルメ呼ばわりされ、感染増加を助長しており、また世界的にもマラリアや住血吸虫症の脅威はいまだ深刻なレベルにあるということである。

寄生虫病とは、寄生虫によって引き起こされる感染症の総称で、多くの寄生虫はそれ自体では疾病を引き起こさないが、寄生虫病は植物から哺乳類までほとんど全ての生物で発生する。その巧妙な寄生のしくみは徐々に解明されているが、まだ課題も多いということで、本書は日本と世界のさまざまな寄生虫病を紹介し、謎の多い感染メカニズム、対策について解説している。

第1章 なぜ、いま寄生虫病か?－身近に潜む寄生虫軍団

第2章 寄生虫病は世界に広がる－「この蟲だらけの世界」のいま

第3章 寄生虫の生き残り戦略－寄生虫はなぜ宿主から排除されないか

第4章 日本はこうして寄生虫病を制圧した

第5章 世界に貢献する日本の寄生虫病制圧戦略

サブタイトルは、第1章では野生動物から感染する寄生虫、ペットから感染する寄生虫、家畜と寄生虫、日本人の食嗜好・イカモノ食いと寄生虫、高齢化社会における寄生虫病などである。第2章では台湾山地同胞(高砂族)の腸管寄生虫症-私的寄生虫学事始め、タイおよびメコン川流域諸国の寄生虫病、中国の日本住血吸虫症、ガーナのビルハルツ住血吸虫症、ブラジルのマンソン住血吸虫症、ベネズエラで出会った芽殖狐虫などである。第3章では寄生虫(むし)の居所、寄生虫感染における I gE 産生のしくみ、I gE 抗体は寄生虫感染を防御する、寄生虫感染とアレルギー、寄生虫に対するワクチン開発は可能か?など

である。第4章では寄生虫病制圧の道程、日本における寄生虫研究の流れ、学校保健法とゼロ作戦などである。第5章ではマラリア巻き返し戦術、米国発信の寄生虫対策イニシアティブ、日本の「感染症イニシアティブ」とパッケルフ (PacELF) などである。

本書を読むと寄生虫は恐ろしいものだと思う。同時には昭和20年代後半の小学校にマッチ箱に便を入れて持参し、マクニンやサントニンなどの苦い虫下しを飲んだ記憶を思い出す。当時は1学級60人ほどで10クラスほどあったため、廊下に並べられたマッチ箱の数は壮観でその臭い如何ほどであったろうか。

寄生虫の一部は人間に致命的な症状を引き起こすが、ほとんどの寄生虫はそれほど酷い症状は引き起こさない。また、寄生虫症とは決して珍しい病気ではなく、おそらく全く寄生虫に感染していない人などほとんどいないのではないだろうか。寄生虫をむやみに恐れず、致命的な寄生虫にだけ注意しておけばよいという。淡水産魚類は煮るかよく焼く、一般には海のものも生で食べてもよい(例外としてアニサキスなどの幼虫)、牛肉・ブタ肉などは煮るかよく焼く、生野菜はよく洗う、ペットなどと遊んだ後や、食事の前には手をよく洗うなどの日常生活の上で注意することで防ぐことができる。

本書は専門的であるが、わかりやすく解説されており、巻末に参考文献も付しており、この1冊で寄生虫病を理解するには十分である。(学会事務局)